

島根・トップコーチ

(第90号)平成22年11月18日

【発行】 財団法人 島根県体育協会

【担当課】 競技スポーツ課

〒690-0015

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

【第90号発刊にあたって】

第90号は、平成22年度の全国中学校剣道大会で、女子団体準優勝・男子団体5位・女子個人3位の素晴らしい活躍をされた平田中学校剣道部監督・松尾匡樹先生にご登場いただきました。

近年の各種全国大会・中国大会等での素晴らしい活躍に秘められた、指導者の指導観や全中地元開催への思いを語っていただきました。

【プロフィール】

昭和41年10月7日生まれ(福岡県)44歳

昭和60年福岡県立春日高等学校卒業

平成 元年島根大学教育学部卒業

平成 元年島根県立隠岐高等学校講師

(他平成4年までに3校講師を経験)

平成 5年大田市立第一中学校新規採用

平成 8年邑智町立邑智中学校勤務

平成12年多伎町立多伎中学校勤務

平成17年出雲市立大社中学校勤務

平成20年出雲市立平田中学校勤務

【主な競技実績】

剣道 錬士七段 全国教職員剣道大会

個人ベスト8 優秀選手賞 他

【主な指導実績】

平成 9年 全国中学校剣道大会出場

(邑智中として初)

平成18年 中国中学校剣道大会

男子団体 優勝(大社中として初)

平成21年 中国中学校剣道大会

男子個人 優勝(島根県として初)

全国中学校剣道大会

女子個人ベスト32(平田中として初)

全国選抜若鷲旗剣道大会(兵庫)

女子団体 3位 男子団体 5位

礼儀作法最優秀校受賞

全国交流中学生剣道大会(新潟)

女子団体 準優勝 男子団体5位

平成22年全国選抜神崎市長杯剣道大会(佐賀)

女子団体 3位 男子団体5位

全国選抜中学生剣道大会(島根)

女子団体 準優勝 男子団体3位

中国中学校剣道大会(広島)

男女団体 アベック優勝(大会初)

全国中学校剣道大会(島根)

女子団体 準優勝 男子団体5位

女子個人 3位(県として初)

(全中大会出場 3校で通算7回目)

『島根全中を終えて

～平田中学校の実践報告～』

出雲市立平田中学校

教諭 松尾匡樹

私の使命感

教育現場では教員の多忙感の一つに「部活動の指導」が挙げられています。さらに「学力低下」の問題が浮上することにより、全体的にも部活動への取り組みについて消極的になってきている雰囲気があります。

放課後に生徒達と関わっている教員の一人として、部活動についてある一定の付加価値をつけて広げていく必要があると考えていました。実際に中国大会で優勝した教え子達の内、部活動を引退してからテストの点を200点以上も伸ばしたという生徒はいます。ある研修会の情報では都道府県別に国体の順位を並べたところ、小中学生の学力と相関関係が見られたという報告も得ています。さらに運動文化が栄えている地域はうつ病の患者さんも少ないというのです。

保健体育の教員として、これらの研究成果や検証は当然視野に入れながら教育活動を行うべきだと考えていました。

そういった私なりの壮大なビジョンがあって、

剣道の島根全中強化が始まりました。当時、全中で剣道競技が好成績を得られると予測した人は少なかったでしょう。しかし、結果もさることながら生徒達を大きく成長させることができれば、近い将来、高い志を持った剣道後継者の育成につながるのではないかという仮説をたてました。したがって、全国レベルで活躍できる選手で、教員を含む剣道後継者の育成も視野に入れながら強化を進めていくべきであろうという結論に達したのです。

全中の場合、毎大会ベスト8のうち5県ほどが九州勢、それも中高一貫の私立学校や有名道場出身者で占められる場合が多いのです。彼らのその後の進路等を見る限り、私見ではありますが、私立学校を出た選手は私立学校の教員へ。有名道場出身者で日本一になった選手はまた道場経営など、それぞれが自分の育った環境の中に戻っている気がしてなりません。それを考えると公立学校における教員の資質向上や優秀な人材確保を目指すのであれば、私達公立学校の教員が自ら後継者を育てていかなければならないという結論にも達するのです。

指導観

私は剣道が盛んな地域で育ち、高校の後輩、恩師もインターハイで優勝したりしていました。剣道を始めた頃、先生と先輩の気迫のこもった稽古がかっこよく、早く防具をつけて自分もやりたいと思ったものでした。しかし、なかなか先生から声をかけてもらえず、幼なじみの田中君（現中京高校監督）と一緒に勇気を持って先生に交渉に行ったことを今でもよく覚えています。その経験は、指導者になった今、全国各地の先生と積極的に交流できる力になっていると思っています。意思表示ができることにより剣道の技術も確実に向上します。このことは指導者になってから私が大切にしている部分です。

私は子弟同行という意識で指導にあたっています。剣道七段を取得する過程において、重要だと思ったことを生徒にも伝えようと思いました。それは七段クラスを受審する先生方の中で特段私は体が小さく苦勞もしたからです。体格的に恵まれていないということを指導の長所に変えて「工夫」することを学びました。その「ひら

めき」や「技術」を生徒達へ還元しようとしています。情報の分化である「聞いている。聞いていない。理解できる。できない。表現できる。できない。」ということの一つひとつ押さえていく過程を大切にしました。部活動は「総合的な学習」だと考えています。

島根全中までの道のり

～生徒の変容を中心に～

大社中から平田へ異動した時、島根全中までは2年5カ月しかありませんでした。当時の剣道部は、怪我人が多く毎日5人ぐらいの生徒が見学をしていました。剣道のセンスが良い生徒はいましたが、緊張しすぎて試合では自分の力が発揮できなかったり、ルールを熟知していないことで反則をもらい、それが原因で相手に有効打突を与えてしまったりしていました。感情のコントロールが難しく、負けた試合の後に人やものに当たったりする場面も見られ・・・そんな悪循環を引き起こしていたのです。致命的だと思われたことに平田中はここ数年間、全中へ出場した選手がいませんでした。当時、大社中とのギャップに大きな驚きと、初めての地域での教育活動に強い不安を感じたものでした。

<平成20年度> 最初は生徒達の自尊感情を高めることから始めました。生徒達の活躍は道場に掲示し、親さんや雑誌を通して誉めることも行いました。部内で一番面つけが早い生徒はレギュラーとしてチャンスを与えました。副顧問の先生にも相談し、荒稽古はやめて「足裁き」と「板踏み」などの基本稽古は毎日繰り返して行いました。激しい稽古をしても怪我をしない「動きづくり」が大切だと思ったからです。専門家に指導していただき、親子で整体や栄養学の勉強ができる時間を確保しました。稽古するよりもミーティングに費やす時間が多く、「道徳の授業」や稽古の仕方、審判法などの学習会を行い、場合によっては2時間くらいかけた時もありました。

赴任したその年に早くも平田中として大きな転機がきました。県総体の男子個人戦で優勝することができたのです。本人も生まれて初めての優勝が県大会だったので、それは「快拳」でした。私自身も大社中から引き続き3年連続の全中出場となりました。

情報収集として山形全中前に九州大会を観に行きました。優勝候補と呼ばれる選手に20台ものビデオカメラが向けられており、全中で勝ち上がることの難しさを痛感しました。

当時、女子チームは1年生の4人だけでした。予定ではあと2名入る予定でしたが、他の部に入部したのです。これは、当時島根全中に向けての意識の高さが全体にも浸透していないことを意味していました。引き続き、自尊感情を高める活動を続けながら、「負けない剣道」を目指しました。出雲地区新人剣道大会で女子は準優勝をし、個人でも勝部真菜が優勝、木佐が3位に入賞しました。男子も団体優勝を飾ることで一気に全体の士気が上がっていききました。高い意識で基礎練習の徹底を心掛けることができるようになりました。

<平成21年度> 遠征は本当に学びの連続でした。熊本全中を優勝した高森中(熊本)と何度も対戦させてもらいました。驚いたことに、試合数をこなすごとに差が広がるのです。3試合目には5-0(10-0)で完敗してしまいました。敗因が分析できず、仕方なく高森中のBチームの試合会場に行かずと見学をしました。彼らは中学一年の段階ですでに「剣の理法」がしっかりと身につけていたのです。1年生なのでとてもシンプルに伝わってきました。

「剣の理法」とは「応じ技」と「仕掛け技」が一体化していることです。Aチームになるとそれを基盤に「誘い」の技術が巧みでした。それは、うちでも稽古はするのですが、意識として「徹底」までは出来なかった部分でした。この時の衝撃は大きかったです。「力のないチームから確実に2本勝ちができる。」というテーマに絞りこんで強化プランを修正することにしました。冬場のバルクアップトレーニングのおかげで勝ち方もパワフルに見え、全国で戦えそうな雰囲気が出てきたのもこの頃です。

この1年間で練習試合は約400試合。それも、全国各地のレベルの高い練成会ばかりです。福岡の筑紫台高校が初めてインターハイで優勝した時、年間500試合で勝率は90%でした。平田中女子は勝率が85%でした。これは高森中から得た経験から全員がポイントゲッターになったことを意味します。引き分けも入れると91%にもなりました。「引き分け」は代表決定

戦を意味しますから、大将の勝部真菜の個人技を上げることで全中でも戦える自信が湧いてきたのです。本人もそのことはよく分かっていて、「試合の位置取り」を確認することで「誤審」をものにする試合運びまで追求しようと思いました。5月の全国選抜大会で準優勝したことがさらに大きな自信となり、その後は85%を引き上げる稽古。勝部の個人技、負け率の9パーセントを減らす練習に絞られてきたのです。

強化実践と情報収集

「あたご道場(社会体育)」を開設することで、年間を通じて19時まで稽古が可能となりました。地力をつけるなら冬期ということがよくわかりました。他の競技でも同じことが言えるかもしれません。ただし、学習時間は保障し、練習試合以外で1日練習等は行いませんでした。強化の軸となったのは、島根インターハイで活躍した曾田先生(大社高)の「研究と実績」です。それを基盤に中学生が消化不良にならないように配慮しました。技術面では試合で出す技を本人が納得できるまで練習をしました。全中の前日まで基本練習は手を抜かなかったほどです。大会当日、練習会場で「板踏み」1つとっても抜きに出ていたと自負しています。試合をする前の段階で、「もう勝っている」という雰囲気を出せることを目標にしてきました。教科書の読み込みは大切で、模擬テスト(練習試合)では地力はないと認識しています。戦略を含めた「動きづくり」も徹底して行い、場合によっては2時間かけました。「聞く・理解する」ために全員でのミーティングは欠かせません。そうしないと、もう一度ミーティングをしなければならないからです。「工夫」の1つとして、社会体育として遠征に行く場合は保護者へ文書を出しませんでした。それは、「技術」は目で見て、聞いて体得していくからです。遠征計画は自分達で把握させ、生徒から保護者に分かるようにきちんと説明させます。稽古を繰り返しても、技術面で向上が見られない生徒ほど、親さんから「明日は何時に集合でしたか?」という問い合わせがありました。試合場に入るまでに押さえておかないといけないことが山ほどあることを保護者会でも説明し理解を得ています。文書を出さないことで、保護者と阿吽の呼吸で

連携が図れたことに感謝しています。お互いに「感じて動ける支援づくり」は理想の形だと思いました。このことは「教員の多忙感」の解消のヒントになるのかもしれませんが。

全国の有望選手の戦績やデータ収集は3年前から行いました。西日本各地で行われる各種大会の優勝チームへは必ず連絡を取り、練習試合をお願いしました。2年前は、九州で1年生だけの練習試合もさせてもらい、数多く試合に勝たせてもらっています。相手に苦手意識を持たせることで今回の結果を得られたのだと実感しています。

「地元開催で大変でしょう。協力しますよ。」全国の先生方の言葉に涙が出そうでした。今回優勝された燕中学校の堀田先生は東日本の情報提供をしてくださいました。トップレベルの先生方の心の豊かさや人間性に触れたことは貴重な体験になっています。数多くの学校が寝袋を持って本校に駆けつけてくださいました。武道の良さだと思つづく感じています。

まとめ

経験上、選手の自尊感情を高めることで県大会レベルはクリアできることが私の中ではある程度実証されています。さらにブロック大会、全国大会となると「徹底」が求められます。何を「徹底」していくのかはその時のチームカラーによって指導者が決断していかなければならないと思いました。今回、男女とも全国の上位に進出することで確信が持てたことがあります。それは、いかにして自分達で考えて実践できる力(考動)を育むことが重要かということです。きめ細かな指導は欠かせません。しかし、教師が動き過ぎて生徒が「選択できない・考えられない・表現できない」では大舞台での活躍どころか人間力の向上にはなりません。私が育った九州では学校を休むと休んだ生徒が自分で先生や友人に電話で連絡しないと親や先生にひどく叱られました。九州のスポーツ文化の高さは成功しても「よか」。そして失敗しても「よか」ですが、自己表現していくことだけについては厳しく指導が入ります。今回の成果も基盤としてそのような取り組みを大切にしてきたからだと思います。そして、生徒達は高校でも剣道を続けると言っています。

千葉国体観戦記・・・89号に続いて「人が育つ土壌について」

島根で育ち、世界の舞台で活躍してきた錦織育子選手(棒高跳・日本記録保持者)がふるさと選手として再び島根のユニフォームを着た意義は大きい。このことは県民に感動を与えるばかりでなく、大会期間中一緒に過ごした少年選手達へ大きな刺激を与え、少年の素晴らしい活躍に繋がったと思う。錦織選手も、育った島根に恩返しをしたいと願って来たであろう特別な思いが優勝という形にもなり、島根陸上界の土壌に更なる濃厚な栄養剤を与えてくれた。

これまで、土江寛裕(アトランタ、アテネオリンピック出場選手)、杉原加代(世界陸上出場)、荒井(旧姓・辰己)悦加(世界陸上出場)選手等もふるさと選手として島根のユニフォームを着た。島根で育ち日本や世界で活躍する選手が、再び島根のユニフォームで出場する循環ができれば、島根の少年が育つ土壌ができると思った。

少年の活躍のなかで、特に光を放ったのは宇野信之選手(レスリング・隠岐養護)の優勝。高校総体で準優勝に輝いたが、さらなる意欲をみなぎらせて登場する姿はまさに大相撲の高見盛関を見るようなパフォーマンスで、マットに上がる姿にも闘う姿にも感動した。島前高校の澤谷監督や選手、地域の人々に見守られながら、ついに日本一の栄冠を手にした。人が育つ土壌とは、こんな温かさを湛えていなければならないことを感じた。

バドミントンの成年女子島根選抜が東京選抜を破って堂々と5位に入賞した。このチームは松徳学院高の選手達と合同練習を組むお姉さん選手である。松徳学院高の選手が最近実力をつけ、中国チャンピオンに輝いたのも、全国入賞を果たしたのも、このお姉さん選手の影響力は大きい。成年選抜にとっても、この国体は後輩を目の前にした、プライドを懸けた戦いだった。こんな影響をしよう連携がこれからの島根を育てる。

競技力向上統括アドバイザー
荊尾 俊